

人と人のつながり、

東 彼杵町の千綿地区では近年、移住者たちが古民家や倉庫を改修したカフェやレストラン、アンティークショップなどを次々にオープンしている。個性にあふれ、魅力的なそれらの店を目指し、多くの人が足を運ぶこのエリアは、他県からの視察が訪れるなど「移住者の町」として注目されている。

こうしたまちづくりの仕掛け人ともいえるのが、森一峻さんだ。森さんは二〇一五年に農協の米倉庫を改築し、集合型店舗「Sorriso riso」をオープン。その二年後にはこの場所を拠点に、移住者をサポートする「東彼杵ひとこともの公社」を立ち上げ、さまざまなプロジェクトを進めている。

前野さん夫妻に古民家を紹介したのも森さんだ。森さんは改修を手伝ってくれる大工さんの紹介をはじめ、店を軌道に乗せることにも心を砕いた。「リノベーションの過程をSNSで発信することで、おいしいパン屋さんがオープンすることへの期待感を高めるなど、さまざまな仕掛けを行いました」。その甲斐あって、ちわたやのオープンの日、店の

前には大行列が出来た。

あの手この手で数々の店舗を成功へと導いている森さんだが、成功の秘訣はソフト面にあるという。「僕たちは『+たしてひがしそぎ』というグループを作っています。メンバーは移住者や地域の人など約百六十人。例えば『新しい移住者の引越しがあります』とメンバーに連絡をすると、たくさんの方が手伝いに集まってくれる。また、三年前の九州北部豪雨の際、地元の味噌屋さんの福岡県内の支店が被害を受け、味噌屋さんは大きな在庫を抱えてしまいました。そこでメンバーそれぞれがSNSで発信し、二日間で千四百件の味噌の注文を集め、経営の危機を助けることができました。この町の強みは、こうした人と人とのつながり、そして発信力なのだと思います」。

森さんは、移住者ならではの視点を取り入れることで、町の可能性はもっと広がっていくと話す。「何もない田舎」は「ここにしかない町」に変わろうとしている。



「移住希望者の方とは何度も話し合いを重ねます」と話す森さん。



移住者が活躍する千綿地区に、ぜひ遊びに来てください。

東彼杵町

新ナガサキ移住のカタチ
自分らしい生き方

移住者サポート拠点

発信力でこの町を元気にしたい。



Sorriso risoにて。左から前野さん夫妻、森さん、Sorriso risoの店舗スタッフ。